

第5章 現在の和歌山と将来



熊野川と紀ノ川の水利用

時代区分	旧石器・縄文・弥生時代
	古墳時代
	飛鳥・奈良・平安時代
	鎌倉・室町時代
	戦国・安土桃山時代
	江戸時代
	明治・大正・昭和(戦前)時代
	昭和(戦後)・平成時代

熊野川の電源開発

熊野川の電源開発は、第二次世界大戦後の1951(昭和26)年から1970年ごろまでの約20年間に吉野熊野総合開発事業として実施されました。

この開発計画は、わが国で、最も雨の多い大台ヶ原を中心とした紀伊山地から流れる熊野川と紀ノ川にダムをつくり、水力発電所を建設し農業用水を通して、紀ノ川平野だけでなく、水不足の奈良盆地の水田にも水を流す紀ノ川分水事業がおもなものでした。この計画は1947年に十津川・紀ノ川の総合開発計画としてはじめられました。水力発電・林道の建設・農業用水の確保・洪水の防止

など、さまざまな目的に利用するダムを多目的ダムといいます。この多目的ダムを建設する方法は、1933年のアメリカのTVA(テネシー河谷開発公社)の計画にならったもので、わが国も1950年に国土総合開発法を制定して、21か所の地域で実施されました。そのうち近畿地方では吉野熊野地域だけが指定されたのです。



猿谷ダム(奈良県五條市)



熊野川と紀ノ川の総合開発

熊野川流域の多目的ダムは、北山川に坂本・池原・七色・小森の4つのダムと十津川に風屋・二津野の2つのダムが建設されました。これらの水力発電所の電力は、主に遠く京阪神地方まで送電線で送られています。

紀ノ川の分水事業

この事業は吉野川の水を奈良盆地の農業用水に利用しようとする内容です。もともと大台ヶ原から流れる紀ノ川は、下流の紀ノ川流域の水田を養ってきました。紀ノ川流域の人々にとっては命の水であったのです。そのため、紀ノ川流域の人々は昔からの用水の権利があると反対が強く、このような計画は、江戸時代から何度も試みられましたが実施できませんでした。



下淵頭首工（奈良県大淀町）

1950年から1954年にかけて和歌山・奈良両県の話し合いがつづけられ、その結果、太平洋へ流れる十津川の水を紀ノ川に流して、紀ノ川平野と奈良盆地の水田を養うことで話し合いがまとまりました。



大滝ダム（奈良県川上村）

大台ヶ原から流れる吉野川に大迫ダムと津風呂ダムが建設され、奈良県吉野郡大淀町下淵から奈良盆地の東の山麓と西の金剛山地の麓に幹線水路を引き、その幹線水路より低いところにある平野の約10,320haの水田や畑を灌漑しています。一方、五條市西吉野で取水された紀の川用水は紀ノ川北岸だけではなく、一部南岸の丘陵にある田畑を灌漑するのに大変役立っています。また、2003（平成15）年には紀ノ川の洪水調節を主な目的とする大滝ダムが上流に、さらに同じ年には紀ノ川の河口に近い新六箇頭首工にかわって、新しい紀の川大堰の本体が完成し、将来は大阪府への分水が予定されています。



紀の川大堰（和歌山市）